

アレルギー・リウマチ科

1. スタッフ（平成26年4月1日現在）

科 長（教 授）	簗田 清次
副 科 長（准 教 授）	岩本 雅弘
外来医長（学内講師）	釜田 康行
病棟医長（講 師）	永谷 勝也
医 員（教 授）	岡崎 仁昭
医 員（教 授）	吉尾 卓
医 員（准 教 授）	佐藤 健夫
医 員（講 師）	長嶋 孝夫
医 員（講 師）	秋山陽一郎
病院助教	丸山 暁人
病院助教	室崎 貴勝
シニアレジデント	5名

2. 診療科の特徴

当科の診療科名を平成12年4月1日をもってアレルギー膠原病科からアレルギー・リウマチ科へと変更した。患者によりわかりやすい名称とした。これにともないリウマチ患者の紹介数が増加している。

当科はアレルギー・リウマチ・その他の膠原病を専門にはするものの、同時に全身の管理能力も必要とされる。膠原病そのものがその疾患の特質上、多臓器に病変がおよぶこと、および中心となる治療法が免疫を抑制することから合併症として日和見感染をはじめとする感染症を引き起こす頻度が高いことが理由である。この全身管理能力は当科の最大の特徴であり、故にただ単に膠原病の診療にとどまらない。全身管理能力の習得という点は内科医としてもっとも重要なことであり、当科の最大の武器でもある。この点はレジデント教育において、当科がもっとも力を注いでいるものでもあり、同時に附属病院全体の進むべき道でもある。

欧米に比べ約7年の遅れに甘んじていた我が国のリウマチ治療が、利用できる生物学的製剤の増加とともにいまや欧米なみとなった。現在までに当科で導入した生物学的製剤使用患者数は1000例を遙かに超えた。その80%以上の患者で非常に満足できる治療効果が得られており、これらの治療を受けた栃木県内の患者の40%以上において当科が寄与している。地域医療に大きく貢献していると自負している。さらに治験にも開発段階から積極的に関わり、より多くの治療困難症例のQOL改善に貢献した。

生物学的製剤による関節リウマチの治療の実践には多くのマンパワーと時間を必要とする。生物学的製剤による治療を当科で多くの患者に実施できているのは県内各所の診療所との病診連携（栃木リウマチネットワーク）

のたまものである。患者の紹介を受け、初期治療を当科が行い、安定した段階で連携施設での治療へ移行する。しかし、大学附属病院の役割は緊急事態に備えることでもあることから当科でも数ヶ月に一度程度ではあるが併診を継続している。そのことで患者は診療所と大学という利便性と安全性の両面を確保できている。患者にも十分納得が得られ、また少ないマンパワーの当科においても、治療困難な重症例に注力することができた。この栃木リウマチネットワークには83施設（診療所）が参画している。

ジュニアレジデント教育に関しても力を注いでおり、他の内科では行っていない外来研修を取り入れている。毎週金曜日に教授と准教授が指導している。新患をまずジュニアレジデントが診察し、患者の問題点、鑑別診断、検査計画などを短時間に把握させ、その後、教員が教育（precept）しながら患者を診察する方法である。入院患者の場合はすでに診断が下されている症例が多く、短時間に患者の有するさまざまな問題点を把握するという訓練を行うチャンスが少ないことを補う目的である。病棟診療と外来診療はやり方が大きく異なる点を指導している。

平均在院日数の低減は昨年と同程度の達成率を得ることができており、長期にわたる入院でしばしば遭遇するQOLの低下を防ぐことができています。リウマチ膠原病は全国レベルでは平均在院日数が多い診療科である。当科の平均在院日数である14～15日は全国レベルでも最も少ないレベルである。

・ 認定施設

日本リウマチ学会教育施設
日本アレルギー学会教育施設

・ 認定医

総合内科専門医

簗田 清次
岡崎 仁昭
岩本 雅弘
佐藤 健夫
長嶋 孝夫
室崎 貴勝

アレルギー学会指導医

簗田 清次
岡崎 仁昭
吉尾 卓
佐藤 健夫

アレルギー学会専門医
リウマチ学会指導医

簗田 清次 他5名
簗田 清次
岡崎 仁昭

	吉尾 卓	側頭動脈生検	4件
	岩本 雅弘	肝生検	3件
	佐藤 健夫	骨髓生検	3件
	長嶋 孝夫	リンパ筋生検	2件
リウマチ学会専門医	簗田 清次 他7名	その他の生検	6件

3. 診療実績

1) 新患者数・再来患者数・紹介率

新患者数	831人
再来患者数	15,533人
紹介率	70.6%

2) 入院患者数 (病名別)

病名	患者数
関節リウマチ	192
全身性エリテマトーデス	93
強皮症・CREST症候群	38
シェーグレン症候群	52
血管炎症候群	35
多発性筋炎・皮膚筋炎	55
混合性結合組織病	17
リウマチ性多発筋痛症	22
成人Still病	9
ベーチェット病	4
アレルギー疾患	6
その他	46
合計 (重複あり)	511

3) 手術症例 (緊急) 病名別件数

腸骨動脈瘤破裂 (心臓血管外科) 1人

4) 治療成績

5) 合併症例

ICU入室症例	2人
緊急入院率	90人/511人 (17.6%)

6) 死亡症例・死因・剖検数・剖検率

肺炎	4人
肺胞出血	2人
肺高血圧症	1人
肺癌	1人
血栓性血小板減少性紫斑病	1人
計9人 (剖検4人、剖検率44.4%)	

7) 主な検査・処置・治療件数

(他科依頼含む)

皮膚生検	16件
筋・筋膜生検	15件
腎生検	10件
口唇生検	9件

8) カンファレンス症例

(1) 診療科内

2月7日	アバタセプト使用中に間質性肺炎が悪化した関節リウマチの1例
2月28日	肺高血圧症を合併したSjogren症候群、甲状腺機能亢進症の1例
3月14日	CMV感染またはCyAによるTTPが疑われたSLEの1例
3月21日	大動脈炎を合併した再発性多発軟骨炎の1例
4月25日	水疱を伴った皮膚筋炎の1例
4月25日	ニューモシスチス肺炎の2次予防
5月9日	皮膚筋炎様皮疹を伴うMCTDの1例
5月16日	非定型的な限局性強皮症が疑われたシェーグレン症候群の1例
5月23日	中枢神経ループスにおける片側性大脳白質萎縮の1例
6月6日	気管支喘息、好酸球増多、肝障害を認めたEGPAの1例
6月20日	MSSA菌血症の治療期間と感染性心内膜炎の診断について
7月25日	SAPHO症候群と強直性脊椎炎の画像的比較
8月1日	ANCA関連血管炎の寛解導入に対するリツキシマブの有効性
10月3日	発熱、両下肢筋痛、CRP高値、肝機能障害を認め、結節性動脈周囲炎が疑われた症例
10月10日	無菌性膿瘍症候群に対してトシリズマブ使用中アナフィラキシー様投与時反応を起こした症例の治療方針
10月17日	SLE患者に認めた頭蓋内石灰化病変
10月24日	皮膚筋炎に伴う皮疹、機械工の手について
11月14日	心膜炎に対するコルヒチンの有効性
11月21日	clinically amyopathic DMにおける筋生検の必要性
12月5日	巨細胞性動脈炎と高安病の区別
12月12日	リウマチ肺の増悪後にリウマチ性血管炎を発症したRAの1例

(2) 獨協医大呼吸器・アレルギー内科との合同カンファレンス

5月21日 辺縁系脳炎が先行し大動脈炎を合併した再発性多発軟骨炎の1例

11月12日 SLEに後天性血友病Aと後天性Von Willebrand症候群を合併した1例

(3) 整形外科との合同カンファレンス

6月5日 関節リウマチと足部・足関節

12月4日 RA/PMR mimics

(4) 病棟看護師との合同カンファレンス

(病棟連絡会) 隔月で行った。

1月28日

3月25日

5月27日

7月22日

9月30日

11月25日

4. 事業計画・来年度の目標

レジデント教育の更なる充実と若いリウマチ医の育成が喫緊の課題である。

また、リウマチ患者教育をさらに発展させるため市民講座を平成19年から年に1～2回、市町村の公民館などを利用して行っている。平成25年度には11回目を迎えた。これをさらに充実させる。また、(公社)日本リウマチ友の会栃木支部との連携をより緊密にする。